

「我が人生思い残すことなし」

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ = あらゆる街が空襲や原爆によって焦土と化し、300万人もの国民が犠牲となった戦争が「敗戦」という形で終わりを迎えた。

そして50年が経ち、昭男は孫の雄大とはるかに5年ぶりに再会するため関西空港に出迎に来てた。 =

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp)

2. 復興

アメリカの占領により始まった「戦後」は、良くも悪くも日本を世界第2位の経済大国に押し上げ、奇跡的な復興を果たした。

「雄大、はるか。こっちや！」昭男は孫たちの姿を見るなり大きな声を出した。その声に祖父を見つけた雄大は笑顔と共に手を振り返した。はるかもそれに続いて手を振った。

「よく来たなあ。しんどなかったか。ちょっと見ん間に大きくなって。」「こんにちは。よろしくお願ひします。」雄大の返事に妻の美子も関心した様で、「えらいなあ。もう立派なお兄ちゃんや。おばあちゃんなんか背通り越してるやん。」と声を掛けた。「こんにちはおじいちゃん。おばあちゃん。お元気でしたか。」はるかも負けずに挨拶した。「はるかちゃんもお利口さんやね。」美子が顔を向けて頭を撫ぜた。

「ほな行こか。荷物大丈夫か。重ないか。」昭男が言うと「大丈夫です。」と二人の元気な声が返って来た。「昼ごはんは食べた？」今度は美子がたずねると「はい。」とまたも二人の大きな返事に「ほんま二人ともええ子や。」と昭男は目を細めた。

「みんなこっちやで。これから船に乗るんや。」続けて言うと「船で？なんで？どこ行くの？」雄大が不思議そうに聞いた。「そうや。船でじいちゃんの家がある神戸まで行くんやで。」

「えー船で？楽しそう」はるかがはしゃいだ。「飛行機乗って、船乗ってすごいなあ。」美子がそれに合せた。

乗り場に着くと「僕、上がいい。」と雄大が真っ先に船に乗り込み、他のみんなもそれに続いたデッキに上がると心地よい海風が真夏の暑さを和らげ気持ち良くさせた。「神戸港行、間もなく出航致します。」アナウンスが流れ、船は静かに棧橋を離れた。

「雄大、見てみ。あれが大阪の街や。」昭男が東の陸地を指さして言った。「ほんま、ようここまでなった。50年前はあの辺は全部焼野原やった。向こうの山見えるやろ？あの生駒山まで何にもなかった。それがどうや、この埋め立てた空港。そっから続く工場地帯。その先の高層ビル群。よう頑張った。みんな必死やった。何も無い空腹と貧乏の時代からオリンピック、新幹線、万博とあつという間やった。」昭男は感慨深げに一気にまくしたてる様に話した。



感慨深げに一気にまくしたてる様に話した。

「そうやなあ。あの頃は大変やったけど楽しみもあった。もっとよくなるというな。」美子がそれに合せた。

雄大とはるかは少しとまどった様に二人を見つめていた。



(つづく)